石巻支援三七会 ㊤ 10/6

① つつじ野

「これは何か支援をしないと」。東日本大震災のニュース映像を目にした時、最初に抱いた率直な感想だった。

発災から1カ月後の2011年4月、石巻市内の中学校を昭和37年に卒業した首都圏在住の同期生が学校を超えて集まり、未曽有の被害を受けた石巻を支援する会を立ち上げた。中学の同期生としたのは、男女一緒の方が活動に広がりが出ると考えたからである。

昭和37年卒の同期生の集まりということで、会の名前は『石巻支援三七会』とした。コアメンバーは、石巻中、住吉中、門脇中、湊中、蛇田中出身の男女12人で代表、副代表、会計などを置いた。

活動の柱の一つは、子どもたちへの支援。『子どもに笑顔を!』を合言葉に、石巻地区の幼稚園、小・中・高等学校、そして支援学校に、アーティストや特別講師を派遣して、アートの力で子どもたちの心を癒やし明日への生きる力を育む『出前授業』に取り組んだ。

また、仮設住宅の皆さんに対する支援活動や街角の身近なギャラリーホールで被災地の人たちと豊かな時間を共有する『駅前北通りコンサート』、そしてループ組みひもの授業や講演会、合唱オペラ公演なども行った。

活動を始めてから終えるまでの5年間に訪ねた石巻地区の学校は、延べ44校、仮設住宅やコンサート、講演会、展覧会を開催した会場は、延べ32カ所、計76カ所で、参加した子どもたちや仮設住宅、被災地の人たちは、延べ1万1000人に上った。

5年間にわたって支援活動を続けることができたのは、被災地を取り巻く厳しい環境の中で支援活動を支えてくれた20人を超える石巻地区の同期生の存在だった。地元の同期生の支えなくして、私たちの支援活動もあり得なかった。

私どもが取り組んだ支援は、本当にささいな活動にすぎないが、子どもたちが笑顔を取り戻すきっかけになったとすれば、これに勝る喜びはない。

（佐藤　悠）

さとう・ゆうさん　東日本大震災の復興支援グループ「石巻支援三七会」の元代表。1946年7月、石巻市住吉町出身。石巻高、早稲田大商学部卒業後、69年NHK入局。報道記者を長く務めた。退職後、石巻市内の中学校を62（昭和37）年に卒業した首都圏在住者で「石巻支援三七会」を結成（昨年解散）。子どもは独立し、相模原市に妻と2人暮らし。

石巻支援三七会 ㊦ 10/13

② つつじ野

2011年4月にスタートした石巻支援三七会の活動は、満5年を経た16年3月いっぱいで一区切りをつけ活動を終えた。

支援活動の中で最も頭を悩ませたのは、活動資金をどのように調達するかであった。

被災地支援のボランティア活動といっても出演者の旅費やイベント会場の借用料、車代、通信費など最低限の資金は欠かせない。

最も頼りになったのは厚生労働省系の独立行政法人『福祉医療機構』の公的助成。社会福祉振興助成の一環として、東日本大震災の支援も助成の対象となった。最初に助成が決まった時には、「これで活動が継続できる」と安堵したことを鮮明に覚えている。

もっとも、この助成が受けられたのは2回だけで、この他にも企業メセナの資金や国際的な社会奉仕団体の単位クラブ、さらには神奈川のNPO法人、カメラメーカーの賛助金、そして地元有志からの寄付や個人の浄財などによって活動を支えてもらった。こうした活動資金の支援がなければ、5年間の活動を維持・継続することはできなかった。

また、「子どもたちに本モノに触れさせたい」という学校側の要望で『出前授業』の講師には、雅楽の東儀秀樹氏やバイオリンの古澤巌氏、アコーディオンのcoba氏、元NHKアナウンサーの松平定知氏などの専門家をお願いしたほか、講演会や街角コンサートには、ジャーナリストの池上彰氏や歌手のクミコさんらにも登場してもらった。

こうして振り返ってみると私どもの活動は実に多くの人たちの善意と協力に支えられて初めて成立したものだったことを改めて実感している。

5年間の活動記録はホームページのハードコピーを製本し、『石巻支援三七会活動報告ブログ』（上下2巻A4判計780ページ）として、宮城県図書館と石巻市図書館に寄贈した。機会があれば閲覧いただきたい。

（佐藤悠　元石巻支援三七会代表　相模原市南区）